

優先座席

奈良西大寺駅で柿の葉寿司を買い、450円の中華そばを食べた。あっさりしていて値段のわりにはおいしかった。そして、17時58分発の快速急行に乗り込んだ。奈良と大阪を結ぶ幹線路で、通勤時間帯ということもあって車内はずいぶん混んでいた。当然、席に座ることができなくて、かばんの中の研究紀要と指導案の重さがこたえた。近鉄や阪神の車両は、優先座席の割合がJRにくらべるとずいぶん高い。でも、とても高齢とは思えない人や若い人が平然と座っている。これならば、山陽本線や伯備線の方が優先する意識が高いなと思った。

生駒駅で結構な人が下車したが私の前の席は空かない。鶴橋駅まで待たないとだめだなと諦めかけた時に、後ろから声がした。「おっちゃん、座りや。」振り向き、あたりを見まわしたが、彼から見ておっちゃんは近くには私しかいない。自分が老人だという自覚がないし、席をゆずられたこともなかったのだからたじろいだ。けれどもせっかく声をかけてくれたのだから、「ありがとうございます。」と素直に言葉に従った。若者は人なつっこそうな笑顔を見せてうなづいた。20歳にはなっていない。破れたジーンズに薄汚れたスニーカーのかかとを踏んでいる。茶髪で風体だけ見れば何やら危なっかしい感じだ。混雑した電車の中で、二人の周りの空気がとても穏やかになり、さっきまで仏頂面で私の前に座っていた女性もかすかに微笑むような表情に変わった。鶴橋駅で大勢下車したのを見て、彼は私から少し離れた昇降口に移動した。席を譲ったことで周りに雰囲気が変わったことに彼も気づいていて、そのことが彼には面映ゆかったのかなと思った。扉に背をもたせ掛け、足をぶらぶらさせている。学生の様子でもないし、日に焼けた横顔を見ながら、どんな仕事をしている子だろうと想像した。人は風体だけで判断してはいけないなとあらためて思った。座ることができたことに加え、このようなやさしい若者に出会えたことがうれしかった。彼から見れば、出張帰りで疲れているじいちゃんに私は映ったのだろう。きっと、やさしいじいちゃんやばあちゃんに可愛がられた子だろうとも想像した。彼は、上本町駅で降りた。降り際に目が合い、わたしがおじぎをすると、それにこたえてぴよこりと頭を下げ、肩を少しゆすりながら電車を降りていった。

新神戸駅についてから、家内に頼まれていた赤福を買うことにした。家内は、東に向けて出張や旅行に出かけるときはいつも赤福をみやげにねだる。みやげ屋を捜すと、見本はあるが商品はない。「赤福はないんですか。」ときくと、「売れ切れしました。」とさっけなく返事をされた。この時間にあるはずないでしょと言わんがばかりの言い方で、少しいやな気持ちになったが無いものは仕方ない。娘だけにみやげがあるのを知ると、おこりはしまいが残念がるだろうなと思いながら新幹線ホームへの階段を上がった。

新神戸から岡山までは、『のぞみ』だと35分かからない。